

変革の時代へ

1



大学豊田キャンパス（昭和62年）

「長期にわたる財政的苦悩から漸く脱却し、輝かしい太陽の光を眩しいほどにみつめた」

昭和四十一（一九六六）年から二十年を経て財政的な枷からようやく抜け出し、創立者も夢見た大学の学部増設、そして家政学部の男女共学制という大英断を行った清毅理事長には、そんな感触を手記するほどにある到達感と開放感があった。

それは、総合学園として充実させていく時期に入ったことを感じさせた。変革の時代―理想を求めて、はるかなる大河へ…。

思いは広がり、学園各設置校のその後の変容はめざましいものがあった。大学では昭和六十三（一九八八）年九月、豊田キャンパスに経営学部の体育館が完成した。その豊田キャンパスは平成二（一九九〇）年、豊田市都市景観賞を受賞する。翌平成三（一九九一）年五月には経営学部の情報棟を完成させ、図書館、コンピューター研究室、実習室を完備した。

高校の整備・拡充も目立った。

安城学園高等学校では昭和六十二（一九八七）年に本館ホール棟・芸術棟・情報棟処理センターを竣工。平成三（一九九一）年七月に全館冷暖房を設置して、校内設備の整備をほぼ完了した。こうして校舎の全面改築による教育環境の整備と、一方では「女性学」の新設等といった教育課程の改編とによって、建学の精神による人間教育が追求されていった。

一方、岡崎城西高等学校も大きく「変貌」していった。

岡崎城西高等学校では、抜本的に再開発にかかった。昭和三十七（一九六二）年の創立当時に建てられた校舎は古い建築構造で老朽化も目立ってきて、教育環境再整備の聲が高まってきていた。そこで、来る平成四年（一九九二）に学園創立八十周年・岡崎城西高等学校創立三十周年を迎えるのを機に、理事会で全面的な増改築を行う方針を決定したのだった。

2

平成元（一九八九）年から二期に分けて工事にかかり、第一期として中央棟（普通教室等）・東棟・北棟、第二期に中央棟（事務室・職員室等管理関係）・体育館等を竣工。教育棟の一部九階には直径六メートルの天体観測ドームもつくるなど、校舎のランドスケープは一新された。

平成三（一九九二）年七月に新体育館のアーリーナで校内竣工式、十月には竣工記念パーティを行っ



正門南隅から見た岡崎城西高等学校新体育館と新校舎

げることになった。

この躍進の要因は、関係者の熱意にはかならなかった。

「大学進学なら城西へ」

陣頭指揮をとる学校長以下、入試委員が積極的な募集活動を行って進学を志す生徒を集めることに努めた。こうした優れた資質の生徒の受け入れ体制として、大学進学のためのコース別教育課程

で、学内外にその「新装」をアピールしたのだった。それは望外の光栄を招いたりもした。平成四（一九九二）年三月に岡崎市都市景観環境賞を受賞することになり、その優れた建築デザインが認められた。二年前に大学豊田キャンパスが豊田市都市景観賞を受賞したのに続く榮譽だった。

施設整備が行われた岡崎城西高等学校はまた、この頃には多年宿願としてきた「勉強とクラブの両立」が確立されつつあった。大学進学の実績を上げ、進学校としての社会的評価を次第に高めてきていた。

特に昭和六十二（一九八七）年度の大学入試では、五百十八名という創立以来の大量の合格者を記録した。名古屋大学などの国公立大学に六十九名、早稲田大学、関西大学など有名私立大学に四百四十九名。うちこの年度に新設された系列校の愛知学泉大学の経営学部へも八十三名が合格した。これまで進学先は他大学に限られていたが、ここに系列校としての実をあ

を組み、教員たちが骨身を惜しまぬ熱心な指導を行った。それが実効をもたらしたのだった。この五百余名という数字は、生徒急増期の中にあつてこそその快挙ではあつたが、その後も、質量ともに大量の大学合格者を出していくことになった。

3

岡崎城西高等学校の進学実績―ちなみに、昭和五十七（一九八二）年度から平成三（一九九一）年度までの十年間における大学合格者総数は三千八百八十七名。その後半の五年間は、前半期よりさらに一・三倍増、国公立大学合格者に限ると二・七倍もの伸びを見せたのだった。国公立大にも一年に十数名が合格するようになり、大学進学者数において、「岡崎城西高等学校は西三河の公私立高校中で五指に入る」とまで評価されるようになった。また、大学進学における特異な現象として、海外の大学（海外の日本校も含む）及び国内の外資系大学への進学者も目立った。

*

学園の充実はクラブ活動にも反映し、その活躍は社会的にも大きく矚目どつもくされるものがあつた。昭和六十年代に入ると、特に大学女子バスケット部の全国的な活躍が目立った。

学泉がくせんの女子バスケットボールの戦歴は、短期大学において昭和三十五年全日本学生選手権に初優勝。以後六年連続で優勝を果たした。この間公式試合二百十六連勝の偉業を記録するなど、伝

の活躍だろうか。

4



13年ぶり8回目の全国優勝を遂げた大学女子バスケットボール部（昭和58年）

統的に強豪ぶりを誇り、昭和五十年代末頃から再び黄金時代を築く。

昭和六十年代には毎年、全日本バスケットボール選手権大会、日本女子学生バスケットボール選抜大会、西日本学生バスケットボール選手権大会などに出場。優勝、準優勝をかつさらった。それは「連戦連勝」、まさに破竹の勢이었다。

平成三（一九九一）年度には、大学女子バスケット部は東海学生バスケットボール選手権大会、東海学生バスケットボールリーグ戦、西日本学生バスケットボール選手権大会、日本女子学生選抜バスケットボール大会、全日本学生バスケットボール選手権大会に優勝し、五冠制覇を果たし、四年三月に大学女子バスケット部全日本学生バスケットボール選手権大会十度目の優勝祝賀会を岡崎名鉄ホテルで行ったりした。

安城学園高等学校でのこの頃のクラブ活動で特筆するなら、吹奏楽部

安城学園高等学校吹奏楽部は国際的な活動も盛んだ。昭和六十三（一九八八）年十二月、中国政



カピラノ大学からの留学生を囲んで（昭和61年）

府から招聘を受け、中国（北京、天津）へ、平成二（一九九〇）年八月にはオーストラリア・ヴィクトリア州政府の招聘を受け、オーストラリア（シドニー、メルボルン、アルトナ）へ演奏旅行と、国際的にも活躍する。その中、平成元（一九八九）年二月には、愛知県芸術文化奨励賞を受賞、全日本アンサンブルコンテスト全国大会（熊本県）ではトロンボーン四重奏で銀賞を受賞するなどその実力の程も証明される。

勉学とクラブの両立を図る岡崎城西高等学校でも多くのクラブが競い合う。昭和五十年代にはサッカー部が全国高校サッカー選手権大会で三位を獲得（昭和五十六年一月）したのをはじめ、陸上競技部、ハンドボール部、バドミントン部などは、全国選抜大会、全国高校総体、国民体育大会等の常連校に。また、パワーリフティング部は全日本パワーリフティング選手権大会毎年出場し、平成元（一九八九）年八月には団体成績で初の準優勝する快挙を見せた。

*

施設の充実、教育カリキュラムの改訂、そして現れる課外活動の活発化：こうした学園の趨勢すうせうの中、国際化指向も大きな流れとして浮かび上がっていた。学園のこの頃の目立った動きに国際化の推進があった。

国際交流の積極的な展開は清毅理事長の「イズム」によるところが大きかった。戦前・戦時にかけて蒙古で活躍した経験から国際感覚を身につけ国際的に豊かな視野を持っていた清毅理事長は、つねづね「環太平洋構想」を標榜し、早くから教育での国際性に関心を持っていた。

昭和五十七（一九八二）年、短期大学に国際教養科を開設したのはその先例だった。翌五十八（一九八三）年には、カナダのカピラノ大学と姉妹提携を結ぶことになり、九月には同大学から二名の学生を六カ月間受け入れるなど、相互の交流が始まった。

昭和六十二（一九八七）年には中国の北京第二外国语学院と学術文化交流協定、平成元（一九八九）年にはアメリカのニューイングランド大学と教育学術交流協定を締結し、広く海外に目を向けていった。

5

経営学部設立時においても、そのカリキュラムは、語学では英語を共通のベースとし、その上に英語、中国語またはインドネシア語の選択制にした。これは、清毅理事長の「環太平洋を重視、特にアジアが重要」との方針に基づいて推進されたものだった。その結果、経営学部の国際交流では、中国との関係がかなり大きな比重を占め、こうした方針から、中国との国際的な研究活動にも目を向けられた。



日中企業比較研究協定調印記者発表会

平成三（一九九二）年、大学経営学部が中国国家経済体制改革委員会と共同して日中両国の企業経営の比較研究に関する協定に調印した。研究は同委員会経済体制・管理研究所と愛知学泉大学経営研究所で行われ、平成四年（一九九〇）年、平成四年（一九九〇）年、平成五年（一九九一年）の三年間に及ぶ共同研究の成果として『中国の企業改革』、『中国の企業経営』（税務経理協会刊）が刊行された。

中国国家経済体制改革委員会とは、続いて平成七（一九九五）年、政府企業関係をテーマとした共同研究に関する協定に調印するなど、提携を進めた。

国際交流は、もとより高校でも活発だ。

安城学園高等学校においては、地元安城市・岡崎市の姉妹都市との高校生交換派遣で交換高校生が選ばれたほか、学校行事では韓国への修学旅行、オーストラリアへの海外研修旅行、語学研修ではカナダ、オーストラリア、イギリスへホームステイ、一方、アメリカやカナダ高校生の短期留學生の受け入れ。そして教科課程では語学教育（英語、中国語、スペイン語、ハンゲル語）の充実、社会科学教育の一環として行われる「世界史セミナー」。クラブ活動では海外交流（吹奏楽部、インターアクトなど）がある。

また、岡崎城西高等学校においても、姉妹校提携（オーストラリアで二校）や語学研修（オーストラリアへのホームステイ）、韓国東亞

高校とのハンドボール海外交流試合などが行われた。

6

平成四（一九九二）年、学園は創立八十周年を迎える。

記念事業として三月に全国私立高等学校女子ソフトボール大会を安城で開催したが、これを皮切りとして、十一月十日に名古屋市民会館ホールでウィーン交響楽団記念演奏会、二十二日には名古屋観光ホテルで記念式典及び懇親会を開催して、愛知県内の有力学園としての存在感を示した。

その後の実勢もとどまるところを知らなかった。それは、まず大学の拡充となって現された。平成三（一九九一）年五月の経営学部情報棟の完成に続いて、平成五（一九九三）年四月には、経営学部経営情報学科を増設した。履修モデルを、既設の経営学科は「経営学」「国際経営」「産業経営」の三モデルに変更し、経営情報学科は「システム開発」「情報管理」の二モデルで出発した。経営情報を統括して管理することのできる人材の育成を図った。

翌六年には、家政学部生活文化コースを増設した。被服、欧米文化の二コースを廃止して、栄養、食品科学、生活文化の三コース制とした。

また、コース制の整備とともに、ハード面の整備も。家政学部と短期大学が同居している岡崎キャンパスの再開発工事に着手した。



完備された岡崎キャンパスの体育館(奥)と学生食堂(左)。手前は「学びの泉」

これは、大学創設のときから既に二十数年が経過し、老朽化が目だってきたのと、学生数も創立当初の二百名弱から四百名近くに倍増してきており、特に家庭科教員を目指す男子学生が全国から集まり、その数の増加に伴い男子学生のための設備が不足してきており、全面的な建て替え、キャンパス全体の再開発が求められることになったからだった。

再開発は平成七(一九九五)年三月に完了したが、このことによって、矢作川沿いにある舳越町一帯は、愛知学泉大学・愛知学泉女子短期大学・岡崎城西高等学校が並んで、白亜の鉄筋校舎が林立することになり、高見の場所ともなる矢作川堤防から望んだそれは、大規模な学園王国出現[〃]といった光景だった。

こうした中、平成五(一九九三)年四月、岡崎城西高等学校の校長(第六代)に清毅の次男・曉^{あき}が就任した。

曉は同時に学園理事にも就いたが、まもなく副理事長、七(一九九五)年四月には大学・短期大学の学長代行も兼任し、学園を担うキーマンとして囑望されていった。

ここに、学園は新しい潮流を迎えることになる…。